

〈ファミリーの通知〉

期末試験3日目。長い試験期間があと1日で終わる。この憂鬱から明日の今頃には解放されているのだ…。そんなことを考えながら、いつものように友人と歩いて帰っていた。

「そろそろホストファミリーの通知来るかなあ？」

ふと友人がいった。

「あー、来るかもねー。」

曖昧に返事をする私。どうせ来てないよ。そんなことより、試験はまだ1日残っているのだ。翌日のテストの方が重大だった。

重い足取りで家に帰ると、

「咲ちゃん、コレ。」

とあって、母が封筒を差し出した。もしや、と思ってよく見ると、JTBと書いてある。本当に來た。友人の予感に当たっていたのだ。いそいで封を開けて中をみる。当然、中の紙は全て英語だ。一刻でもはやく情報を得たいのに、全然頭に入っていない。もどかしさを抑えて、一つずつ丁寧に読んだ。

Host mother・・・Kristine Woodhouse-McKay

Host father・・・Scott McKay

ほうほう。ホストマザーがクリスティーンさんで、ホストファザーがスコットさん。クリスティーンさんはフランス語の先生らしい。そしてファザーは…ん？なんだか見覚えのあるスペルである。

Panasonic。どうやらファザーは日本の企業につとめているらしい。なんだか嬉しかった。日本の企業で働いている人が、自分のホストファザーになってくれるのだ。もしかしたら親日派の人なのかもしれない。少し安心した。

そして、家族構成の欄を見ると、なにやら文字が書いてある。子供がいる！しかも2人も。すぐに目に飛び込んできたのは日付だった。2010とかいてある。これは誕生日だろうか。すぐには信

じられなかった。2010年生まれなんて、1999年生まれの私にとってみたらあまりにも若すぎたのである。でもそれは誕生日でまちがいはなかった。4歳の女の子と、3歳の男の子がいることが分かった。3歳と4歳！なんてかわいいらしいだろう！女の子の名前はメーガンで、男の子の名前はマーカスであった。それから犬が2匹と猫1匹！まったくの私の理想のホストファミリーである。あまりに嬉しかったので、その後テスト勉強がはかどらなかった。

ちなみに私は、事前申し込みのときに、希望とするホストファミリーの情報を一切書かなかった。それにもかかわらず、こんなに理想的なホストファミリーに当たったことは、なんとも素晴らしい巡りあわせだなと思った。

〈人生で最も忙しかった1週間〉

長いテスト期間がようやく終わって、さあ夏休みだ！というわけにはいかなかった。なぜならやるが多すぎたからである。荷造り、買い物、お土産さがし、事前学習、卵焼きと味噌汁の練習、浴衣を着る練習、それから部活に習い事…。なにもしていなかったの、テストが終わってからの1週間ですべてやらなければならなかった。母はたくさん手伝ってくれた。私がいけない代わりに、買い出しはほとんど母がしてくれた。ホストファミリーへのお土産も全部選んで買ってきてくれた。「ほんとに間に合うの？」と心配する母をよそに、私はたいへんのんきにしていた。荷造りを始めたのは、出発の3日前である。でも、母が

「必要なものを思い出したときに書きなさい！」
「買って机のマットに、「買うものリスト」「用意するものリスト」を挟んでくれたおかげで、私は一つも忘れ物をすることなく、カナダへ飛び立つことができた。

私は今回、これが初めての海外旅行だった。不安なことはたくさんあったが、母は私が少しでも楽しく快適に過ごせるよう、いろんなことをアドバイスしてくれた。出発の1時間前になって、急きよ

スーツケースを替えなくてはならなくなったときは焦ったが、どじでのんきな娘に最後まで協力してくれた。そんな母には本当に感謝している。

〈いよいよ出発〉

出発の日の朝は、緊張で朝食がのどを通らなかった。初めての海外だったので、税関にひっかからないかとか、パスポートを無くさないかとか、他の人ならなんてことないであろうことが、私にとっては心配で仕方なかったのである。そのせいもあってか、語学力についての心配はほとんどしていなかった。まあなんとかなるだろうくらいの気持ちだった。

空港に着いてもずっと無言でいる私を見て、母が笑った。そして言った。

「大丈夫よ。このお母さんだって、3か月間留学できたのよ。お母さんの子供だもの、絶対大丈夫！」

涙が出そうだった。その代わりに、2週間、どんなことがあっても、全部自分の糧にしようと決めた。

あんなに不安がっていたのに、友達に会うと緊張は一気に解けて、両親とはあっけなく別れてしまった。いよいよカナダへ向かうのだと思うと、前向きな気持ちしかわかなかった。

〈トロント到着〉

13時間は意外とあっという間だった。飛行機を出れば、そこはもうカナダだ。看板が英語で書いてある。背の高い外国人に囲まれている。全部当たり前のことだが、私にとっては、目に見えるすべてが、テレビでしか見たことない世界だったので、変な感じがした。果てしなく遠くまで来てしまったな、と思った。入国審査を通り抜けて、ようやく不安が和らいだ。いよいよカナダライフのはじまりだ！

バスの車窓から見える景色は、とにかくひろくて緑が多くて、高

い建物がない分、遠くまで見渡せた。日本はなんて窮屈なのだろうと思った。

私たちが泊まったチェルシーホテルは、トロントの中心街にある、市内で最も大きなホテルだった。窓からは市内の様子が見えた。東京とはまた違った都会の雰囲気だ。一緒の部屋だった友人は早々と寝てしまったが、明日からの生活への不安と時差ぼけとで、私は一睡もできなかった。窓から見える街は、夜遅くになっても明るいまだだった。

〈トロント観光とファミリーとの対面〉

次の日はトロント市内の観光をした。やがて来る、ホストファミリーとの対面の時間が、早く来てほしいような、来てほしくないような、複雑な気持ちを抱きながら楽しんだ。州議事堂、トロント大学、CNタワー、そして野球観戦。とっても充実していた。なによりも、多民族国家カナダを肌で感じる事ができてよかった。

そしていよいよ、私たちが2週間ステイする、バリーへと向かうときが来た。途中のバスは、時差ぼけでどうしようもない睡魔がおそってきたので、熟睡した。しかしあまり寝てばかりもいられない。眠い目をこすりながら、初めにどんなあいさつをしようかとか、お土産はいつ渡そうかとか、いろいろシミュレーションしながら、しおりを片手に、友達とたくさん練習した。まわりの景色が、どんどん都会風からのどかな雰囲気になっていくにつれて、ホストファミリーに会う時間が近づいてきているのだと思うと、緊張が高まった。

ついに、ホーリーメドーズエルメンタリースクールに到着した。私たちは2週間ここに通うことになる。これからウェルカムセレモニーが行われ、私たち生徒は一人ずつ名前を呼ばれて、ホストファミリーと対面する。入口の前にはたくさんさんのホストファミリーが、名前を書いた看板を持って立っている。でも、そこに Sakino の字は見つけられなかった。体育館に入って、いよいよ緊張は最高潮に

達した。どんなファミリーだろう…。お偉いさんの英語のお話をきいたら、いよいよ対面の時間だ。さっきまで一緒に英語の練習をしていた友人たちが、次々に呼ばれていく。

笑顔の練習と、いろいろシミュレーションをしながらその時を待った。そしてついに呼ばれた。

「Host mother. Kristine Woodhouse-McKay. Sakino Tomo.」

ほとんどのホストファミリーが、2人か、多くても3人しかきていない中、私のホストファミリーは、総勢5人でお出迎えしてくれた。家族全員来てくれたのである。

「Are you Sakino?」

優しい声で、ホストマザーが聞いた。

「Yes! Yes!」

笑顔でうなずいて、前へと進み出る。ちょっと緊張していたが、満面の笑みで、ホストファミリーに囲まれるようにして、記念撮影をした。学校にいたのはほんの10分程度で、すぐ車に乗って、ホストファミリーの家へと向かった。

〈My wonderful host family〉

ホストペアレンツの第一印象は、とにかく優しそうだということだった。そして実際、素晴らしく優しいホストペアレンツだった。いつもスマイルで、「Sakino」と呼んでくれる。私はこの声を一生忘れないだろう。

メーガンは、想像していた以上にかわいらしい女の子だった。そしてとってもやんちゃだった。最初の記念撮影には、ホストファザーの腕にぶら下がった状態でうつっていた。日本から持ってきた折り紙やあやとりは、必要ないかもしれないと思っただくらいだ。そんなことを考えていたら、ホストファザーが

「メーガンは、とってもおてんばなんだよ。」

と困った顔で言った。

マークスもまた、天使のようにかわいかった。まだ話す英語がた

どたどしい。そこもまたかわいらしかった。でも、初めは恥ずかしがって、ホストマザーのかげに隠れてちらちらとこちらを見ているだけだった。

「マーカスは、とっても恥ずかしがり屋さんなの。」
ホストマザーが言った。自分の小さいころを思い出した気持ちになった。

〈ホームステイ初日〉

学校から家へ向かう途中、ピザ屋さんへ寄った。どうやら夕食を買うようだった。学校で用意された軽食を食べているとき、ホストマザーが、

「今はこんな軽食だけど、家へ帰ったらもっと **special** な料理にするわ！」

というようなことを言った。どんな料理を作ってくれるのだろう。楽しみだった。

ようやく家に着いた。赤いレンガ造りのかわいらしい家だった。そして大きい。わくわくしながら中へ入ると、犬たちがお出迎えしてくれた。外国の犬はとてもフレンドリーである。初対面であるにもかかわらず、警戒するどころかびよんびよん足元をとびはねて、うれしそうにしている。これからこんなかわいい犬たちと生活できるなんて夢のようだ。

家へついてすぐ夕食の時間だった。あれ、料理はしないのかな？ 食卓に並べられたのは、先ほど買ってきたピザやパンやホットドッグ。マザーが作る **special** な料理を期待していただけに、少しがっかりしてしまった。でもおいしかった。

夕食を終えると、メーガンが、そわそわしだした。彼女は私に家の中を案内する係のようで、食事がおわるなりホストマザーに

「Sakino 家の案内するのはだれだっけ？」
と聞かれて

「私よ、私！」

とはしゃいだ。元気いっぱいなメーガンを先頭に、家族みんなで家の中のことをひとつひとつ丁寧に説明してくれた。再びメーガンがそわそわし始めた。

「Please open the door!」

いわれるがまま扉を開けると、そこは私の部屋だった。大きなベッドとひきだしが2つ。それからテレビと、窓もあって、なぜかドルハウスも置いてあった。すてきな部屋だ。そして、ベッドの上には大きな袋がおいてあった。

「What's this?」

私が聞くと

「This is for you!」

プレゼントだ!

「Really? Thank you very much!」

そういって中を見ると、カナダの国旗がデザインされたバスタオル(カナダ人サイズ)、カナダのブレスレット、ストラップ、それからキャンディとメッセージカードが入っていた。ホストマザーが「おなががすいたら、こっそり食べてね。」

といった。そしてホストファザーが、

「今日からここは君の家だから、自由にしていいんだよ。」

と言ってくれた。みんながわたしのことを、心の底から歓迎してくれていることがわかって、とてもうれしかった。メッセージカードにも、あなたと過ごすのを本当に楽しみにしていた、とかいてあった。嬉しい。やさしいホストファミリーで本当によかった。不安なことはもう何一つなくなった。

〈School Life〉

次の日から、早速学校が始まった。相変わらずの時差ぼけで全く寝付けなかった私は、長い夜が寂しくて仕方なかった。スクールバスの中で友達と日本語を話したときは心底安心した。

初日はバリーのダウンタウンを観光した。とにかくいろんなところ

ろを歩き回ったので疲れたし、時差ぼけで眠すぎた。しかし最後にはおいしいアイスクリームを食べて、大きな湖にも行って楽しかった。私は最初それが海だと思っていて、水平線が見える！なんて感動していたら、友達に「湖だよ！」と言われて驚いた。琵琶湖が最も大きい湖と言われているなんて、カナダ人にとっては信じられないだろう。

バリーは、とにかく空が青くて緑が多い。どこを写真に撮っても絵になる。あんなに青く澄んだ空を今まで見たことがなかった。町全体がのんびり穏やかで、東京のような慌ただしさはどこにもない。老夫婦が、平日にテラスでゆったりコーヒーを飲んでいた。なんともほっこりする光景だった。東京ではあり得ない。

街の人々はみんなノースリーブを着ていた。日焼けとか気にしないのだ。私たちにとってはちょうどいい気温でも、

「今日は暑すぎるわ！プールに入らなきゃ！」
と言って笑う。誰もが開放的でフレンドリーで、短い夏を惜しむように楽しんでいる。

学校は、ただの授業ばかりではなかった。一日中教室にいたのはたったの一日で、それ以外はカナダの先住民のことを学びにいたり、劇の練習をしたり、歌を歌ったり、緑地へ草花を採りに行ったり、ショッピングをしたり、とにかく盛りだくさんだった。授業の中では、英語で自分の意見を発表する機会がたくさんあった。自分の思っていることを英語で話し、それが理解されて、さらに共感されるというのは、とても感動的で楽しいことだった。私は積極的に発言した。英語を話すことの楽しさを改めて感じた。

〈ホームステイ2日目〉

学校が終わると、ホストマザーが迎えに来てくれる。たいてい私は最後まで残った。私のホストマザーは基本的に時間にルーズで、いつも4時半を過ぎないと迎えに来なかった。車に乗り込むと、ま

ず「学校はどうだった？」と聞いてくれる。わたしは「とっても楽しかったよ！」と答える。

放課後が暇になる日はなかった。この日は家に親戚が来ていたらしく、

「今家の中は大混乱なの。おじいちゃんとおばあちゃんと、いところたちと、それから私の妹。全員集合よ！」

とホストマザーが言うので、家に帰ってみると確かに大混乱であった。メーガンとマークスのいとこたちであろう子供たちがみんな遊びに来ていて、大にぎわいだ。その中に、私と同年の女の子がいた。話してみたかったが、その子はシャイで、彼女からはなしかけてくることはなかった。たまに目があってお互いニコっとするだけである。どうにかして話してみようと思い、一緒にテレビゲームをした。でも、たまに「Stop!」とか、「Good!」といった言葉をかけられるだけで、まともな会話はできなかった。「犬の散歩に行こう。」と言われたのでチャンスだと思い、ホストマザーの妹と3人で出かけた。しかし、やはり話しかけられずにおわってしまった。

夕食の準備は毎日手伝った。この日も、お客さん用の *Special* なディナーを作るといって、マザーは張り切っていた。私は、「何かお手伝いできることはある？」と聞いて、野菜を切ったり、食器を並べたり、簡単なことだができる限りのことをした。すると、ある日、ホストマザーがホストファザーに、

「Sakino はほんとうに助けになるわ。」

といているのを聞いた。それを聞いて嬉しくなった。

〈カナダで食べたおいしいもの〉

ある日の放課後、車に乗り込むとホストマザーが

「今日は、夕食の後、すべてのカナダ人が知っている有名なカフェに行くわよ！」

といった。夕食の後カフェに行くのか、と内心不安に思いながら、「やった！楽しみだわ！」

といった。夕食を終えて向かったのは、Tim Horton's というところだった。後でわかったが、このカフェはカナダのいたる所にあるたいへん popular なカフェチェーン店で、ドーナツが有名らしい。メーガンに「どれが一番好き？」と聞いて、「これ！」と指差した、チョコとシュガーがたっぷりかかったドーナツを注文した。食べてみると、甘いけど、とてもおいしい。夕食の後だというのに、あつという間に食べてしまった。

日本でもお馴染みの、サーティワンアイスを食べに行ったこともある。私は、ヨーグルトベリーのような、日本では売っていない味を頼んだ。とつてもおいしかった。ミドルサイズを頼んだつもりが、どう考えてもラージサイズのものが出て来た。ホストファザーはこれより大きいラージサイズのチョコレートアイスをダブルで頼んでいて、すごいなあと思った。

ホストマザーに、「お菓子を作るのは好き？」と聞かれて、「大好き。」と答えると、「今度作ろうね。」と言われた。そして、2週間のステイ中に、チョコレートケーキと、チョコチップクッキーと、それからアイスクリームをホストマザーと一緒に作った。どれもおいしかったが、特にチョコチップクッキーがおいしかった。レシピを書いてくれたが、それは単なる作り方が書かれた紙というよりも、ホストマザーとお菓子を作った思い出として宝物のような感じが今ではしている。

〈ホストファミリーとの最初の1週間〉

ある日の放課後、マーカスと恐竜ごっこをして遊んだ。恐竜ごっこといっても、私が恐竜のキグルミを物陰から登場させてマーカスが逃げ回る、という遊びである。英語はほとんど使わない。恐竜を登場させるときにハローというくらいである。こんな単純な遊びでも、マーカスはものすごくはしゃいだ。子供が遊んでもらってうれしいのは万国共通なんだなと思った。まともな英語を使わなくても、マーカスといっしょに仲良くなることができたのでうれしかった。

毎日いろんなことがありすぎて、お土産を渡しそびれていた。暇を見つけて「日本からお土産を持ってきたよ。」と言って、ホストマザーを座らせ、一つ一つ説明をしながら渡した。もってきたのは、父が京都出張のときに買ってきてくれた、抹茶のカントリーマラム、日本のグミが人気と聞いたので、アンパンマンのグミ、お寿司や忍者や温泉マークがかかれたタオル手ぬぐい、浮世絵のコースター、万華鏡、金色に桜の絵がかかれたきれいな手鏡、富士山の柄のがまぐちポーチ、ちりめん柄のシュシュ。一個一個、電子辞書を片手に必死で説明した。ホストマザーも「こういうこと？」と確認しながら、一生懸命私の英語を聞いてくれた。タオル手ぬぐいに描かれた温泉マークを説明するのに、まさか学校の授業が役に立つとは思っていなかった。中でも抹茶のカントリーマラムは好評で、ホストマザーが毎日職場に3個くらい持って行ってくれた。

日本のことを紹介するために、スマホのカメラフォルダを開いたついでに、家族の写真や友達との写真をたくさんホストマザーに見せた。一つ一つ説明するのは頭を使う作業だったが、徐々にうまく説明できるようになっていった。ホストマザーが理解してくれるのも早くなった。気づいたらかなり流暢に外国人っぽく話せるようになっていて、それがまた楽しくて私はひたすらしゃべり続けた。気づいたら夕食の時間になってしまったが、ホストマザーはかまわず聞いてくれた。

〈成長したこと〉

たったの2週間のステイだったのに、いや、2週間だったからこそ、最初の1週間は帰りたくて仕方がなかった。ホームシックというよりは日本シックだろうか。カナダの自由で開放的な雰囲気になれるのには時間がかかった。初めての海外だったから、余計にカルチャーショックが大きかったのかもしれない。時間に遅れるのが当たり前なこと、食器が汚れていても平気なこと、授業中スマホをいじっても水を飲んでも許されてしまうこと。比較的厳格な家庭に育

った私にとっては、驚きの連続だった。

日本に帰りたい。丁寧で礼儀正しくて、お上品な日本に帰りたい…。

いつまでもこんなことを考えてはいけないのはわかっていた。どんなことがあっても糧にすると決めたのだ。このままでは2週間何も吸収できずに終わってしまう。どうすればいいんだろう…。

「ものは考え様。楽しんだもん勝ちよ。」と母が言っていたのを思い出した。でもどうやってこの考えを変えたらいいのか分からなかった。いろいろ考えた挙句、何も気にしないことに決めた。日本と比べるのではなく、こういう文化もあるんだな！と受け入れる。これこそ異文化交流だ。私は世界が狭かった。保守的で、細かいことにこだわりすぎて、自分で自分の世界を狭めていた。もっといろんなことを吸収しようという意識に欠けていたのだ。世界は大胆で、大雑把で、ワイルドだ。小さいことを気にしていたら、この先グローバルな世の中を生きていくことは出来ない。

私は、日本の丁寧で、繊細で、上品な文化が好きだ。そしてそんな文化のもとに生まれたことを誇りに思っている。でもこれからは、そんな日本を誇りに思う気持ちに加えて、世界を知り、またそれを受け入れていく心構えが必要だ。せっかく来たのだから、もっと楽しまなくては。細かいことは気にせず、もっと大胆になってみよう。

そうして意識を変えた瞬間、カナダがもっと楽しくなった。カナダの自由な雰囲気が好きだなと思うようにもなった。考え方を変えるのは難しいことだけど、その瞬間、より多くのことが見えるようになったのだ。

〈ホストファミリーと過ごした土曜日〉

平日のうちから、休日はどこへ行きたいか聞かれていた。私は迷うことなく、ナイアガラの滝と答えた。

明日からしばらく日本語は通じない。周りの子は、この日が来る

のが怖いと言っていたが、私は楽しみにしていた。

ホストファミリーの家からナイアガラの滝までは、車で2時間半かかるらしい。道路が混んでしまうし、家を出るのは早いだろうか、今日は早めに寝なきゃと思っていると、ホストマザーが

「明日は10時ごろ出発するから、9時半くらいまで寝ていいわ。」
といった。そんなに遅くて平気なのかな、と思ったが、

「わかった。」

といった。そして朝になった。9時半まで寝ていられるわけもなく、8時くらいに起きて、完璧に用意をして待っていると、掃除が始まった。それも出発30分前だ。よく考えればこの1週間、掃除をした気配が全くなかったので、おかしいなと思っていたら、毎週日曜日が一斉にお掃除をする日らしかった。すみからすみまで丁寧に掃除をしていく。出発予定時刻の5分前になって、ホストマザーが

「ごめんね、あと1時間出発を遅らせるよ。」

といった。11時なんかに出てほんとに2時間半で着くだろうか。

不安だったが、

「わかった。」

と行って、さらに1時間待った。

11時には出発したが、案の定、渋滞にはまった。2時間半たってもつかない。3時間、3時間半、4時間…

夕方の3時半になって、ようやく着いた。結局4時間半もかかってしまった。さあ、早く滝を見て帰ろう。でないと帰るのが遅くない。ホストマザーについて、歩き出した。ナイアガラの滝の周辺は繁華街になっていた。怪しげなお化け屋敷やお店がたくさんあって、とても楽しい。カナダじゃなくてアメリカのハリウッドに来たみたいだ。お土産屋さんもたくさん見たかったが、時間がないので我慢した。てっきり滝を見に行くのだと思っていたら、全然違う方向へ歩いていく。どこ行くんだらう…。不安な気持ちを抑えてついていくと、着いたのはパターゴルフ場。え、いまから？も

う時間ないのに。まだ滝を全然見ていない。ゴルフだけして、もう帰らなきゃいけない時間だから帰るよとか言われたらどうしよう。いろいろ不安になったが、気を取り直してここは楽しまなきゃと思った。もしかしたら、私にナイアガラの滝を見るだけではない、他の思い出も作らせてあげようとしてくれているのかもしれない。ありがたいことだ。

結果、私は家族の中で1位になった。しかし私はそれどころではなかった。どんどん日が暮れていく。ライトアップされたナイアガラの滝もきれいらしいが、次いつ来られるかわからないので、できれば昼間のナイアガラの滝を見ておきたい。それに今から帰っても家に着くのは8時を過ぎる。そうすると子供たちの就寝時間に間に合わない。

焦るわたしをよそに、ホストペアレンツは疲れたから、どこかで夕食にしようと話しているらしかった。このままだと、ほんとに滝を見ないで帰ることになるかもしれない。まずい。焦っていても何も伝わらない。きちんと自分の思いを伝えなければ。会話の合間を見計らって、勇気をだして

「Kristine? After dinner, I want to see Niagara Falls more.」

といった。文法はめっちゃくちゃだったと思うが、なんとか伝わった。

「もちろんよ！じゃあ今から行きましょう。」

夕食の前に、滝を見に行くことになった。よかった！とりあえず、お目当てのものは見て帰れる。カナダで一番見たかったナイアガラの滝を、ついに生で、現実のものとして見る事ができるのだ。私は恵まれているなあ。心の底からそう思った。ふと母が「ナイアガラの滝、私もみたかった。」といていたのを思い出して、少し申し訳なく思った。

あんなにすごい景色はみたことがなかった。でかすぎる。自然の力でこんなものがつくられるなんて。日本にこんな大きいものがあったら、人間の住むスペースがなくなってしまう。広大なカナダだからこそ作られた自然だと思った。改めて自然の偉大さを感じた。

今度は家族4人で見に来たいなと思った。

〈ホストファミリーと過ごした日曜日〉

昨日家に帰ったのは、夜中の11時だったので、次の日はみんな遅くまで寝ていた。ホストマザーに、

「土曜日はナイアガラの滝へ行くけど、日曜日はどこへ行きたい？」と聞かれて、

「ショッピングに行きたい。デイズニーストアに行きたい。」
と言ったら

「もちろんよ！」

と言われた。ホストマザーはなんでも聞いてくれた。どこ行きたい？何食べたい？どっちがいい？こんなにわがままばかり聞いてもらっていいの不安になるくらいだった。

ということで今日は、私の要望通り、午前中ショッピングへ行つて、午後からホストマザーのお父さんのところへ行つて、彼のお誕生日パーティーをすることになった。午前中にそのためのチョコレートケーキをホストマザーと一緒に作った。砂糖とチョコレートを入れる分量が尋常じゃないので、出来上がりが心配だった。

ショッピングでは、デイズニーストアでTシャツと、それからマニキュアを買った。ホストマザーは、お父さんへのプレゼントを買っていた。

家に帰って昼食を食べて、チョコレートケーキを持ったら、出発した。20分ほど乗って着いたのは、平屋建ての豪邸だった。みんな久しぶりの再会を喜んでいたが、お互い早口な英語で会話しているので、まったく聞き取れない。一人でぼつんとすわっていたら、ホストファミリーが

「大丈夫かい？スマホでゲームしていいんだよ。」

と言ってくれた。ホストマザーのお母さんが、積極的に料理をすすめてくれた。それらがとてもおいしかったので、たくさん食べた。ホストペアレンツが、私が独りになってしまわないよう、私を挟む

ようにして座ってくれた。そして、

「夕食のあと、地下室でビリヤードしよう。」

と耳元でささやいた。ホストマザーとホストファザーがたくさん気遣ってくれたおかげで、英語がほとんどわからなくても、雰囲気を楽しむことができた。食事が終わって、子供たちが地下室で遊びだした。私もそれに加わった。

「Let's play Hide-and-peek!」

ハイドアンドシーク？かくれんぼのことだろうか。確認してみると、やはりそうだった。広い家なので、隠れるところがたくさんあって楽しかった。それに、家の中を隅々まで見て回ることができたので、日本との家のつくりのちがいも感じることもできた。

初めてのビリヤードは難しかったけど楽しかった。やり方がわからなくても、ホストファザーがわかりやすい英語で全部教えてくれた。球が入るとものすごくオーバーにほめてくれるから嬉しかった。

ホストマザーとつくったチョコレートケーキは、ちよつと甘かった。しかも周りには生クリームがたっぷりついていて、甘いバナラアイスも添えられていた。初めはおいしかったが、全部は食べきれなくて残してしまった。

帰る前、ホストマザーのお母さんと少しだけ話すことができた。今何歳？いつ帰るの？学校は楽しい？大学受験はあるの？不思議とすら英語が出てきた。多分話していることは全く大したことないんだろうけれども、まるでカナダ人になった気分だった。お別れのときにはハグされて、

「これからも頑張ってるね。」

と言ってくれた。

こうして、英語漬けの2日間は終わってしまった。

〈レディーファースト〉

カナダにあって、日本にはない文化に、レディーファーストとい

うものがある。私のホストファザーは、常にレディーファーストだった。扉を開けても、絶対に自分が先に通ることはなく、私やホストマザーやメーガンから通す。そしてまだ小さいマーカスにも、「レディーが先だよ。」と教える。男性に親切にしてもらう経験は日本ではあまりないので、最初は戸惑ってしまったが、親切にしてもらえるとやはり嬉しいものである。そしてその時私は、ちょうど学校の授業でやっていたジェンダーのことを思い出した。

世界には、男女が社会的に平等でない地域が多くある。「女性だからこうしてはいけない」という社会的な風習がある国や、女性が社会的に差別を受ける国があることを授業で学んだ。働く場が制限されたり、賃金が男性より少なかったり、そもそも働かせてもらえなかったり。日本も例外ではない。昔に比べると改善されてきてはいるが、それでもまだ男女の差は0ではない。男尊女卑という言葉があるくらい、日本では女性の地位が確立されなかった時代がある。

しかしカナダはそうではない。職場やビジネス面での現場はわからないけれども、すくなくとも日常生活においては、女性を尊重し、大切に扱う文化がある。女性は子供を産むという、生物的な役割がある。それは本来、たいへん尊く、尊重されるべき大切な役割であると私は思う。日本を含め、世界には女性の権利が守られない国が多くある中で、女性を大切にしようという考え方が浸透していて、またそれが文化として人々の生活にも表れているカナダは素晴らしい国だなと思った。

〈最後の1週間〉

2日間の週末を乗り越えて、残るは1週間。だいぶ生活に慣れてきて、カナダの良さが身に染みてわかってきた。メーガンとマーカスは相変わらず毎日プールに入っている。もう残り少ないので、二人ともっと仲良くなるために、私もたくさんプールに入って一緒に遊んだ。

ある日の放課後、この前とは別の親戚の家に行くことになった。親

戚の家へ行くのは正直あまり好きではなかったが、いい経験になる
と思って頑張った。その日行った家には、この前話することができな
かったあの女の子がいた。今度こそ話そうと思って、できる限り近
くにいた。すると、一緒にフリスビーをしようと言われた。幸運に
も、ちょうどこの日、学校で生まれて初めてフリスビーをしたとこ
ろだった。少しコツをつかんでいたもので、楽しくやることができた。
フリスビーには、他の子供たちも参加して、みんなでゲーム形式で
やった。初めはルールが全くわからなかったが、子供たちが丁寧に
説明してくれたのでそのうち楽しめるようになった。自分でも驚く
くらい、そのとき英語がすんなり理解できた。

夕食の後、ようやくあの女の子と話すチャンスが来た。女の子が、
新聞に載っていたクロスワードをやり始めたのである。私も隣で見
ていた。すると、女の子のほうから「これわかる？」と聞いてきて
くれた。その時は答えられなかったが、わかる問題は「こうじゃな
い？」と言うことができた。ほんの少しだったけれども、最後に話
すことができたのだった。

私たちは先に帰ることになった。すると、さっきまで遊んでいた
子供たちがやってきて、お別れをしてくれた。まだ数回しか会って
いないし、まともに話したのは今日が初めてだったというのに、あ
る男の子は

「僕のこと忘れないでね！」

と叫んできた。おばさんに、ハグもされた。そして、「頑張ってね。」
といわれた。出会ってまだ2週間しかたっていないのにこんなに別
れを惜しんでくれるのだ。カナダ人はほんとうにあたたかいなあと思
った。

お別れの日は刻一刻と近づいてくる。日本にいたとき、最後のお
別れのときに、ホストファミリーに何かお礼をしたいと母に相談し
たところ、筆で名前を書いてあげたらいいんじゃないといわれた。
そのアイデアを参考に、色紙に何か文字を書いて渡そうと考えた。
いろいろ悩んだ末、選んだ文字は「愛」。行書で書くと見た目もかっ

こいしいし、意味も英語でわかりやすいからだ。日本で書く時間がなかったので、カナダに習字セットをもつて行って、書くことにした。なんならホストファミリーの前で披露しようとも考えていた。ということで、カナダで自分の部屋で心を込めて書いた。色紙の裏にはしっかりと

「THANK YOU Aug.01.2015 From Sakino Tomo」

と英語で書いた。筆で漢字で名前を書いただけでは、あとになって誰が書いたものかわからなくなりそうだったからだ。

いよいよ明日はフェアウェルパーティーという日の放課後、いつものように車に乗り込むと、

「もうあなたがいられるのは数日だけど、何をしたい？」

と聞かれた。そうか、もうすぐ帰るのか…。急に寂しくなった。私は「もう一回 Tim Horton's に行きたい。」と答えた。

その日も夕食を食べたあと、家族みんなであるいて Tim Horton's へ向かった。こうして外をゆっくり歩くのも最後かな…。カナダの空気をおもいっきり吸い込みながら、一歩ずつ噛みしめるように歩いて行った。

私は、Ice Capp という、コーヒーとミルクを混ぜたような、フロズンドリンクを頼んだ。友達や、カナダ人がみんな飲んでいたので、帰国の前に一度飲んでみたかったのである。一口のむと、これはおいしい！大好きになった。ホストマザーに「おいしい？」と聞かれて、これ以上ない、という感じで、「おいしい！」と答えた。

よく考えたら、このアイスカップも、それからゴルフのプレイ代も、サーティーワンのお金も、全部ホストファミリーが出してくれていた。私はそのことを謝った。もっと早くに言えていればよかったのに、タイミングを失っていた。すると

「全く問題ないさ。今君は僕たちと同じ家族なんだから。」

ホストファザーが言った。申し訳ないのと嬉しいのとで、何度も

「Thank you.」といった。

〈帰国前日〉

楽しかったカナダライフがもうすぐ終わろうとしている。帰る日の前日は学校でフェアウェルパーティーがあった。それが終わって家へ帰りつくと、本当にこれが最後なんだという実感がわいてきた。荷造りをしていると、ホストマザーが「Sakino?」と呼んだ。部屋をでると、隣のメーガンの部屋に入るよう言われた。いつもメーガンのベッドで、メーガンとマーカスが一緒に寝ている。ホストファザーは毎日8時になると2人をベッドに連れていき、寝つくまで2人を見守る。私は3人が寝ているそこへ入っていった。部屋が暗い。どうして呼んだのだろうと思っていると、ホストマザーが入ってきて、明かりがついた。手にはプレゼントを持っている。そして「Here you are!」と叫んだ。お別れのプレゼントだ。「Thank you!」といって中を見る。写真と、メッセージカードとそれから私が買おうか迷って結局止めた、クリスマスオーナメントが入っていた。写真を見ると思い出がよみがえってくる。ナイアガラの滝で撮った写真、メーガン、マーカスとプールに入っている写真。もうすでに、このときにもどりたと思った。ホストマザーが

「みんなでビッグハグをしよう。」

といった。メーガン、マーカス、ホストマザー、ホストファザー、そして私。5人で大きなハグをした。

「あなたと別れたくないわ。」

ホストマザーが言った。「私も。」といった。ホストマザーが泣いているように見えたのは気のせいだろうか。

そのあと、筆で「愛」と書かれた色紙をプレゼントした。

「これは私が書きました。この漢字は英語で LOVE という意味です。」

ホストファミリーはとても喜んでくれた。

「So cool!」

ホストファザーが言った。

「英語の勉強もしていて、こんなカッコいい字も書けるなんて、

君は天才だね！」

外国人はなんでもオーバーだ。ほめ方もオーバーだから照れ臭い。書道が日本の文化の一つであること、お習字を5歳の時から習っているのもう10年以上になることを話した。芸は身を助けるとはこういうことを言うんだなと思った。

「明日は special な朝ご飯をみんなで食べに行くから、早起きしてね。」

ホストマザーに言われた。フェアウェルパーティーがあったせいで夕食をみんなで食べられなかったから、朝ご飯をみんなで食べようということだった。最後の最後まで本当に優しいホストファミリーだ。どの友達に聞いても、こんなことをしてくれたホストファミリーはいなかった。

〈お別れの日〉

次の日の朝は早起きして荷造りを済ませた。メーガンが、「荷物を詰めるのを手伝おうか？」
と言ってくれたが、大丈夫と断ってしまった。

出発の前に部屋の写真を撮っておいた。いよいよ2週間過ごしたこの部屋ともお別れだ。最後にペットたちにお別れを言いたかったのに、まだ寝ているようでさようならを言えなかった。

着いたのは、朝ご飯専用のレストランだった。おいしそうなものがたくさんあったけど、私はフレンチトーストを選んだ。ホストファミリーとする最後の食事だ。ホストマザーはずっと寂しそうにしていた。もちろん私も寂しくてたまらなかったが、帰りたくないなんて口にしたら泣いてしまいそうだったから、黙っておいた。

食事を終えて、お会計をするとき、子供たちに飴がプレゼントされた。私ももらった。その飴は帰国してからも食べられずにとつてある。

学校へ向かう途中、また Tim Horton's に寄った。今度はドライブスルーだった。私は何も言わなかったのに、ホストマザーが私が

大好きといったアイスカップを買ってくれた。「ありがとう！」大切に飲んだ。

とうとう学校に着いてしまった。もう本当に最後だ。この2週間いろんなことがあった。正直嫌なこともたくさんあったし、何度も帰りたいと思った。でも、どんな時でもホストファミリーは優しくあった。私は何度も何度も「Thank you so much.」といった。ホストマザー、ホストファザーとハグをした。メーガンとは何度もハグをした。メーガンはずっと泣きそうな顔でホストファザーの胸に顔をうずめていた。そして最後にみんなでまたビックハグをした。私より先にホストマザーが泣いていた。それを見て、私は我慢の限界だった。時間がきてバスに乗り込んだ。座席に座った瞬間、どうしようもないほど涙があふれてきて、泣きじゃくった。バスが出発するまでの間、ぐちゃぐちゃの顔でガラス越しのホストファミリーに手を振り続けた。

バスが動いた。どんどん遠ざかるホストファミリー。投げキッスをされた。急いで私も返した。

さようなら。短い期間だったけど本当に楽しかった。

半分ほどになったアイスカップを飲みきってしまうのが惜しくて、なかなか飲めなかった。

〈帰国、そしてその後〉

日本の家へついて、すぐにホストファミリーへメールした。そして、写真を見せながら家族に思い出話をたくさんした。話せば話すほどカナダが恋しくなった。

正直、思い残したことがいくつもある。(両親には申し訳ないが。) もっとたくさんお話すればよかったと思っているし、カナダでしかできないいろんなことをやりたかった。もっといろんなものを食べておけばよかったし、行きたかったところもあった。でも、そのためには2週間は短すぎた。海外というものに慣れることに時間がなかった。だからいつかもう一度カナダへ行きたい。やり残したこと

をやりたいし、ホストファミリーにあんなによくしてもらったのに、語学力が足りなかったために伝えきれなかった感謝の思いがたくさんある。それらをきちんと伝えたい。今度は1か月、いや、1年行ってもいいかもしれない。

その時私はいくつになっているだろうか。メーガンとマーカスはどんな子に成長しているだろうか。いつか来るその時、語学力も、それから人間的にも今より成長していただけるよう、これからも努力をしていきたいと思っている。